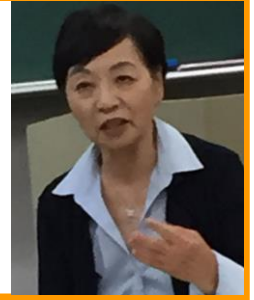


## 9月のさろんテーマ

### 水と風と生きもの〜中村桂子・生命誌を紡ぐ

中村桂子（JT生命誌研究館館長、スローライフ学会副会長）



生命誌を提唱する中村桂子さん。その活動を追い、彼女のメッセージを凝縮させた映画がこのたび完成しました。この渾身の映画作品公開に合わせて、映画タイトルを今回の「さんか・さろん」のテーマとし、映画館で鑑賞した後、参加者で生命誌について語り合いました。

#### ■生命とはなんぞやを探求する

映画をご覧いただき、ありがとうございました。「生命科学」という言葉は今は当たり前に使われていますが、1970年に恩師の江上不二夫先生が創られた。江上先生はDNAが発見されたのを契機に、バラバラに研究されていた生物学を総合化し、生命とはなんぞやへの取り組みを始められた。西洋哲学が人間中心に進んできたのに対して、地球丸ごとの生命とはなんなのかに挑んだのが先生のすごいところです。

また当時水俣病が明らかになり、人間の活動が海の生物に悪影響を与え、それが巡り巡って人間に還って来ることなどがわかってきたこともあって、やはり生きもの全体を捉えることが大事だという考えが広まってきたのでした。私も生命科学研究所で仕事を始めました。

一方、同時期にアメリカではライフサイエンスという言葉が使われだした。これはニクソン大統領の時代、がんの撲滅が目的で、現在のIP細胞などの再生治療に繋がってきているのですが、地球のすべての生命の意味を総合的に読み解こうと考えた江上先生の考えとは、少々違っていました。

また、医学予算はこのアメリカ型のライフサイエンスの方に多く使われ出した。それは大事なことではあるのですが、江上先生が言いだされた生命科学をきちっとやらないと、技術のみ発達してしまう危険性を私は感じた。それで生命科学研究所の仕事の後、大阪に生命誌研究館を作りました。

#### ■生命に興味を持った人たちに成果を

人間は生きものであり、自然の一部であるという日本人が考える昔からの生命観を、学問の中で採り入れて探求しようというのが私の気持ちです。

名前に館（ホール）と付けたのは、音楽ホールがそうであるように、興味を持ったすべての人たちに、一流のプロが一流の成果を提供する場にしたいと考えたから。そしてこの館が20

年たったので記録をつくりたいと望み、できたのが、今日の映画です。

#### 【意見交換】

Q 今の若者は、食べ物について、生きものでなく、商品だとしか思っていないが。

A 映画に出てくる喜多方の小学校には、理科社会科と同じように農業科がある。「グローバル時代の小学校ではコンピュータ教育が大事だという。だが将来コンピュータの株取引よりも、その土地で蕪を育てる方が大事ではないか」と私が新聞に書いたところ、前市長が共鳴し特区事業で始まった。子どもの作文に、「枝豆が大きくなれよ、と水をかけた」という文章が出てきた。スーパーで商品として売っている枝豆が、彼にとっては大きく育てと祈る「生きもの」と受止められている。枝豆をつくる過程で天候について考え、肥料を考えた。技術を身につけるために交渉能力やコミュニケーション能力がついた。農業科をやると生きる力がつくと、私は自信をもって言えますね。

Q 女性が輝く社会とはどんなものですか。

A 安倍内閣の女性閣僚や女性社長になることが輝くことだとは思えない。後輩たちにああなれとはいいたくない。もっと普通の生活感覚をもった女性を、社会は認めてほしい。女性も権力の中で男性を凌ぐことが活躍だと思ってほしくない。地方には女性の感覚を生かした素晴らしい方がたくさんいる。そういう力を社会が認め、発揮することで女性が輝くと思う。

Q これからの館の目的と経営の秘訣は。

A 生命誌館を20年間やってきて、生命科学に関するデータはたくさん集まった。しかし、生きものとは何かを考える学問にまでは育っていない。それを考えていきたい。

生命誌館は40人くらいの規模でやっていて、男の人たちは全員、規模を大きく…と言いますが（笑い）、この規模が良い。でも学問として深めたい。組織をいつも活性化させておくのが館長としての私の役割で、「99%ダメでも1%良いことがあれば、マイナスを言わずに良いことを考えよう」が組織の約束事です。

（2015年9月15日開催）